

手術室見学実習を通して学生が捉えた手術室看護師の役割

多田 貴志, 三ツ井 圭子, 田中 初枝, 眞鍋 知子

了徳寺大学・健康科学部看護学科

要旨

本研究は、学生が手術室見学実習を通して学んだ手術室看護師の役割を明らかにすることを目的とした。平成27年度に成人看護学実習Ⅱ（急性期）を履修したA大学学生77名の手術室見学実習のレポートから学生の学びを抽出し、分析した。抽出した内容のうち手術に関わる看護師の役割に関する内容が152記録単位抽出され、記録単位より21のサブカテゴリ、5のカテゴリを抽出した。手術や麻酔に対する患者の不安や緊張、羞恥心への配慮など、手術の一連の流れの中で看護師の行為自体は目に見えていても自分で意味づけなければわからない看護師の役割について学びとっていた。手術中に医療者に身を委ねることを余儀なくされる患者の状況を目の当たりにしたことから、【患者の心情を推しはかる】関わりをし、【患者の安全確保】を担う手術室看護師の役割を捉えていた。

キーワード：手術室看護師の役割，周手術期看護学実習

Roles of surgical nurses observed during operating room practice

Takashi Tada, Keiko Mitsui, Hatsue Tanaka, Tomoko Manabe

Department of Nursing, Faculty of Health Sciences, Ryotokuji University

Abstract

This study aims to clarify what nursing students can learn about the roles of surgical nurses through direct observation during a visit to an operating room. Reports of visits to the operating room by nursing students who took the Adult Nursing Practical II (Acute Phase) class of “University-A” in the academic year of 2015 were analysed. What the students wrote in their reports and what they learned were analyzed by classifying similarities in contents. This analysis extracted 152 records on the individual roles of nurses in their practice that the students identified. These records can be classified into 5 main categories with 21 subcategories. Students learned about the roles of nurses that must be given meaning personally in order to be understood even if the actions themselves are observable in the regular process of an operation, in such cases as providing care to alleviate or consider patient anxiety, nervousness or shame due to the operation or anesthesia. By personally observing how patients undergoing operation entrust their bodies to medical professionals, students appreciated the roles of surgical nurses in surmising patient feelings/mentality and taking responsibility to ensure patient safety.

Keywords: role of surgical nurse, perioperative nursing practice

I. はじめに

周手術期看護を学ぶ学生にとって、手術室実習は学生の学習に対する動機付けの機会になること¹⁾、手

術室見学を行うことで学生は漠然と理解していた手術患者のイメージを体験の中で再確認する場として、手術見学は意義あるものと捉えていること²⁾などが明らかになっており、手術室見学実習から得た学びの意義は大きいと言える。A大学看護学科の成人看護学実習Ⅱ（急性期）では、手術中の患者の状態を知り、周手術期看護に活かすことを目的として、3週間の実習中に受け持ち患者の手術室入室から退室までの看護を経験する実習を行っている。このような手術室見学実習で学んだ事について学生は、手術室見学レポート（以下レポートとする）にまとめている。レポートは、手術室における学びについて学生自身がテーマ設定をして記載するよう指導しており、個々の学びや印象に残った内容が記載されている。先行研究では、手術室見学実習における学生の学びを分析した報告はあるが、手術室看護師の役割に焦点をあてて分析した研究は見当たらない。そこで、本研究は学生が手術室見学を通して学んだ看護師の役割に着目し、学生のレポートを分析することにより、成人看護学における周手術実習での指導内容や方法に示唆を得ることを目的とした。

Ⅱ. 研究目的

手術室見学実習を通して学生が捉えた看護師の役割を明らかにする。

Ⅲ. 研究方法

・研究対象者

A大学4年次生96名

・分析方法

研究の同意が得られた学生のレポートに記述された学生の学びの内容を1文脈を1記録単位として意味内容を損ねないように文章を抽出した。記録単位を意味内容の類似性に基づき分類し、サブカテゴリとカテゴリに分類した。

・倫理的配慮

研究目的、方法について口頭および文書で説明し、文書にて同意を得た。また、実習についての成績認定はすでに終了しており、今後の科目の成績にも一切影響しないことを説明した。本研究は研究者所属施設倫理委員会の承認を得て行った（承認番号2813）。

Ⅳ. 結果

研究協力の同意を得た対象者の中で、レポートの記述に欠損のない77名のレポートを分析した。手術室見学レポートから、手術室見学を通して学んだ看護師独自の役割に関する内容が152記録単位抽出された。記録単位から21のサブカテゴリ、5のカテゴリが抽出できた。抽出された5のカテゴリを学生が捉えた手術室看護師の役割とした。記録単位例と共に表1、表2に示す。以下、カテゴリを【 】, サブカテゴリを〈 〉で示す。

【患者の安全確保】は〈患者の安全・安楽を第一に考える〉〈患者の安全・安楽のために連携を図る〉〈患者の安全を守るために閉創前に複数名で確認する〉〈感染予防を徹底する〉という4つの役割で構成されていた。〈患者の安全を守るために閉創前に複数名で確認する〉に関する記述が最も多くみられた。【手術を

円滑に進める】は術前と術中の患者・物品・環境についての準備，術式や合併症など手術に関する看護師の知識についての準備の8サブカテゴリから構成されていた。【患者の安全と継続看護のための情報共有】は〈患者が安全に手術に臨めるか患者が同席して最終確認する〉〈患者が安全に手術に臨めるか看護師同士で確認する〉〈患者が順調に回復するため病棟看護師に術中の情報を提供する〉という3つの役割で構成されていた。術前後の申し送りからの学びが記述されていた。【患者の心情を推しはかる】は〈安心・安楽を供与する〉〈不安や緊張を緩和する〉〈信頼関係の構築〉〈手術室における倫理的な配慮〉という4つの役割で構成されていた。【知識を基にした予測の看護】は〈患者の状態を考慮した看護〉〈正確な観察力や判断力を持ち不安定な状況に対応する〉という2つの役割から構成されていた。

表1 学生が捉えた手術室看護師の役割

カテゴリ 記録単位数(%)	サブカテゴリ(記録単位数)	記述単位列
患者の安全確保 40(26.3%)	患者の安全を守るために閉創前に複数名で確認する(19)	事故防止にむけた器械出し看護師と外回り看護師の連携 器械出し看護師と外回り看護師による安全のためのダブルチェック
	患者の安全・安楽のために連携を図る(9)	手術室看護師は手術侵襲の軽減のため他職種と連携する役割がある 円滑で事故の無い手術のための手術室看護師の役割
	患者の安全・安楽を第一に考える(6)	患者の安全安楽は場所を問わず最優先事項 安全のために役割分担する。
	感染予防を徹底する(6)	清潔、不潔を理解した手術室看護師の役割遂行 感染予防のための無菌操作の重要性
手術を円滑に進める 34(22.4%)	円滑な手術を進行する(11)	手術の進行に応じた行動 円滑な手術の進行に関わる手術室看護師の役割
	手術の進行を理解・予測し動く(7)	手術室看護師は状況把握と判断力が必要 患者の負担軽減につながる看護師の判断力と予測した行動の重要性
	術前の物品準備を整える(3)	安全安楽な手術のための術式や機材の準備 手術が円滑に進むための準備を担う看護師の役割
	術中の物品準備を整える(3)	患者の安全のための分業と自主的な判断で準備する 必要時に使用できるよう整理整頓して準備する
	術中の環境を整える(3)	手術の流れを把握して術中の環境を整える 円滑な手術のための環境整備
	術前と術中の環境を整える(3)	安全な手術のための環境整備は看護師の役割 手術が円滑に進むための準備を担う看護師の役割
	術前の患者の準備を整える(2)	術前、患者が不安がらないよう声掛けをする 不安緩和のための声掛けやタッチングが大切
	術中の患者の状態を整える(2)	医師の動きに合わせた準備 万全の態勢で手術が行えるように準備や確認を行う
患者の安全と継続看護のための情報共有 33(21.7%)	患者が安全に手術に臨めるか看護師同士で確認する(16)	病棟看護師から外回り看護師への術前申し送りによる安全確保 基礎疾患の申し送りが安全な手術につながる
	患者が順調に回復するため病棟看護師に術中の情報を提供する(11)	外回り看護師から病棟看護師への術後の申し送りは安全安楽な継続看護に繋がる 外回り看護師から病棟看護師への申し送りによる継続看護
	患者が安全に手術に臨めるか患者が同席して最終確認する(6)	本人確認と申し送りによる患者間違い防止 外回り看護師と病棟看護師での声出し確認による事故防止
患者の心情を推しはかる 26(17.1%)	不安や緊張を緩和する(11)	麻酔時の不安軽減のための関わり 麻酔導入前からの精神的な援助
	安心・安楽を供与する(9)	分かりやすい言葉での声かけによる患者の安心感の確保 患者の安楽につながる看護師の行動
	手術室における倫理的な配慮(5)	羞恥心に配慮した声かけ 患者さんの代弁者としての役割
	信頼関係の構築(1)	短時間での信頼関係の構築
知識を基にした予測の看護 19(12.5%)	正確な観察力や判断力を持ち不安定な状況に対応する(14)	迅速な対応と判断のために手術室看護師に求められる知識 手術中の患者を観察・アセスメントする能力の大切さ
	患者の状態を考慮した看護(5)	麻酔覚醒直後の患者への危険を予測した関わりの必要性 身体侵襲を予測し観察および処置を行う看護師の役割

V. 考察

〈患者の安全を守るために閉創前に複数名で確認する〉に関する記録単位数が最も多く、遺残防止のため閉創前に確認することが外回りと器械出し看護師に共通した重要な役割だと捉えていたと考えられる。次いで、〈患者が安全に手術に臨めるか看護師同士で確認する〉の記録単位数が多く、サインアウトや申し送りなど、目に見える事象の中でもその行為のための時間が確保されていることは看護師の役割として捉えやすいと推察される。

一方、【患者の心情を推しはかる】では、手術や麻酔に対する患者の不安や緊張、羞恥心への配慮など、手術の一連の流れの中で看護師の行為自体は目に見えていても自分で意味づけなければわからない看護師の役割について学びとっていた。赤石らは看護師の役割として手術前や麻酔覚醒後の不安緩和があることを明らかにしている³⁾。しかし、術中も含めた〈手術室における倫理的な配慮〉について述べられている文献はみあたらない。麻酔によって医療者に身を委ねる状況になるという事実を目の当たりにしたことが【患者の安全確保】の重要性を強く認識することにつながり、そのような状況にあるからこそより羞恥心やプライバシーに配慮し、患者の代弁者としての役割を担うことが重要な役割であることを学び、それらすべてを内包した【患者の心情を推しはかる】という役割を捉えたと考える。大谷らは、手術室を見学するだけの1日実習よりも、学生の受け持ち患者の手術見学を行う実習において、患者の個性に応じた、より具体的な学びへと発展させることができることを明らかにしている⁴⁾。A大学の手術室見学実習は基本的に受け持ち患者の手術を見学させていただいており、術前から関わっている患者の手術を実際に見学することが【患者の心情を推しはかる】役割を捉えることにつながったと推察される。

【手術を円滑に進める】は、時間軸では術中だけでなく術前に関する記述がみられ、対象においては患者だけでなく、物品・環境に関する記述がみられた。幅広い視野で術前から術中の時宜に応じた対応をすることで手術室内全体をコーディネートするという看護師の役割を捉えたと推察する。手術看護とは、周手術期における患者の安全を守り、手術が円滑に遂行できるよう、看護を提供することである⁵⁾。【患者の安全確保】と【手術を円滑に進める】の2つのカテゴリが抽出できたことから、学生は手術室見学実習を通して手術室看護師にとって重要な役割を学びとることができていたと言える。

【患者の安全と継続看護のための情報共有】では、看護師だけでなく患者が同席すること、紙ベースだけでなく声に出し伝えて確認することが患者の安全のために重要であることを認識したと考える。また、術中の看護師の役割だけではなく、病棟看護師との連携を含めた周術期の看護師の役割について学ぶことができていた。術後の申し送りが病棟での継続看護につながることを学べており、手術室見学実習は学生自身が術後の合併症予防のために患者にどのような看護を実践すべきかを考える良い機会となったと推察される。

【知識を基にした予測の看護】では、術前から入室まで関わった患者と異なり、本人の訴えがない中で予測をすることの困難さを実感したことで予測の必要性を認識することにつながったと考える。手術による侵襲が身体に大きな影響を与える上に予測困難な状況であるからこそ、看護師に求められる能力や看護実践の重要性を捉えたと考える。

先行研究では、学生が捉えた手術室における看護は、手術患者を不利益から守り、よりよい状態にする目的をもった「患者を中心とした看護」であることが明らかになっている⁶⁾。本研究においても、学生の記述から患者の安全・安楽や苦痛緩和といった「患者を中心とした看護」のために手術室看護師の役割があることが再確認された。

VI. 研究の限界と今後の課題

本研究は、学生のレポート内容のみを対象に分析しているため、学生が学びを十分に表現できていないと考える。今後は、面接によるインタビュー等の手法を取り入れさらに学生の学びを明らかにしたい。

VII. 結論

手術室見学レポートに記述された学生の学びから、以下のことがわかった。

1. 学生は手術室見学実習を通して5つの手術室看護師の役割を捉えていた。
2. 手術中に医療者に身を委ねることを余儀なくされる患者の状況を目の当たりにしたことから、【患者の心情を推しはかる】関わりをし、【患者の安全確保】を担う手術室看護師の役割を捉えていた。
3. 幅広い視野で時宜に応じた対応をし、術中だけではなく病棟看護師とも連携を取る手術室看護師の役割を捉えていた。

謝辞

本研究を行うにあたり、調査にご協力いただいたA大学学生およびご指導を頂いた各病院の看護師の皆様に心より感謝いたします。

引用文献

- 1) 奥村美奈子, 兼松恵子, 北村直子ほか (2003) 手術室実習を通しての学生の学び. 岐阜県立看護大学紀要. 3 (1), 89-94.
- 2) 原嶋朝子, 加藤智恵子, 鈴木夕岐子ほか (2003) 周手術期看護実習の手術見学における看護学生の学習内容. 日本看護学会論文集: 成人看護 I. 34, 12-14.
- 3) 赤石三佐代, 川久保和子, 宮武陽子 (2009) 成人看護学実習 (急性期) における手術室実習での学生の学び. 足利短期大学研究紀要. 29, 23-27.
- 4) 大谷則子, 堀之内若名, 中井裕子ほか (2006) 手術室見学実習における学び—二つの実習形態の比較検討による考察—. OPE nursing. 21 (6), 98-108.
- 5) 日本手術看護学会 (2005) 手術看護基準 (改訂2版), メディカ出版, 44-46.
- 6) 北村直子, 奥村美奈子, 兼松恵子ほか (2004) 手術室実習を通しての学生の学び第2報—学生が捉えた手術室で行われていた看護—. 岐阜県立看護大学紀要. 4 (1), 92-98.